

未来のためにできること

戸高 大翔

19歳で公務員として働き始めてから、選挙に対する見方が大きく変わった。高校生の頃の自分は、政治について深く考えることなんてほとんどなく、選挙のニュースが流れても「大人たちがやっていることで、自分には関係ない」と思っていた。政治を理解するために必要な知識もなく、どこか「難しい世界」というイメージばかりが強かった。しかし、実際に公務員として働き始めて、行政の仕組みや税金の流れを知るようになると、政治が自分にとってどれだけ身近で、生活に直結したものなのかが徐々にわかってきた。

道路が整備されているのも、学校や保育所の支援が行われているのも、災害対策が進められているのも、全部行政の仕組みの中にある。そして、その行政をどう動かすかを定める人たちを選んでいるのが選挙だということに、改めて気づかされるようになった。こうした政策や事業は、ただ自然と動いているわけではなく、誰かが考え、判断し、決定しているものだ。その「誰か」を決める瞬間が選挙であり、そこに参加しないということは、自分の生活や未来について他人任せにしてしまうことだと気づいたとき、私は、「自分の未来を他人任せにしていられない、自分で考えて選ばなければ納得できない。私の一票で変わる未来があるのかもしれない。」と選挙に対する意識が大きく変わった。

一方で、同世代の中で選挙に関心を持っている人はまだまだ少ないと感じる。友達や知り合いと話していても政治の話題が出ることはほとんどなく、「よくわからない」「難しそう」「投票しても何も変わらない」といった言葉を耳にすることの方が多い。正直、自分も以前はそう思っていたし、政策を調べようとすると専門的な言葉が多く出てきて、理解するまでに時間がかかることもある。忙しいときほど、つい「まあいいか」と思ってしまいたくなる気持ちもわかる。

とはいえ、若者が選挙に行かず、声をあげなければ、若者のための政策は後回しになっていく。実際、人口の多い年代の意見が政治に大きく影響するのは当然で、そこに対抗するには若者も行動しなければならない。投票は一人ひとりでは小さな力かもしれない。でも、すべての若者がしっかり投票すれば、それは大きな意見になるし、政治家たちも「若者の意見を聞かなければいけない」と感じるはずだ。そう思うと、一票の重さは自分が感じている以上に大きいものだと考えるようになった。

公務員という立場上、政治的に特定の人や政党を応援することはできない。その制約はきちんと守らなければならないし、政治に対して適切な距離を保つことも必要だと思っている。でもそれは決して「政治に無関心でいい」という意味

ではない。むしろ行政の現場で働くからこそ、政治や政策の決定が生活のさまざまな場面に影響してくることを理解する機会が多い。だから自分なりにしっかり調べて、自分の価値観に近いと思える人に一票を投じたいと思う。それが自分の暮らす社会に対する、ひとつの責任だと感じるようになった。

19歳の自分にとって、選挙はまだわからないことばかりで、正直、不安になることもある。しかし、それはみんな同じなのだと思う。初めから政治に詳しい若者なんてほとんどいないし、大切なのは「知らないからやめておく」ではなく、「知らないからこそ自分で調べてみる」という姿勢なのではないかと感じている。選挙は未来を選ぶ行為であり、たった一票でも、自分の意思を社会に刻むことができる。小さな一歩かもしれないが、その積み重ねが社会を少しずつ動かしていくのだと思う。

これからも選挙のたびに、自分の頭で考えて、自分の意思で投票したい。そして同世代の人たちにも、「選挙って実はそんなに難しくないし、未来に関わる大事な選択だよ」と自然に伝えていけるような存在になりたい。若者の一票は小さいように見えて、実は社会を変える力を持っている。未来を他人任せにするより、自分で選んで動いていくほうが、前向きで気持ちよく、この社会の中を過ごしていけると私は思う。